

いのちを支え守ること

患者家族から薬の仕事に携わる人へ

NPO法人いのちをバトンタッチする会代表 鈴木中人

第3回

いのちへの確かな思いのある人づくり

「MRの使命とは何ですか?」。MRとして働くことが揺れる時代において、あなたはどのように答えるでしょうか。その使命は、いのちを支え守ることに尽きます。その使命を果たすために、「いのち」をキーワードに患者家族の目線から考える3回シリーズ。第1回(9月号)は患者家族の思いを感じ、第2回(10月号)はMRとして働くことを考えました。最終回は「いのちへの確かな思いのある人づくり」です。

人づくりの現状と課題

MRとして求められる資質は、倫理観、知識、技能とされています。そして、導入教育、認定試験、継続教育など中心に、MRの生涯教育制度があります。

「いのちを支え守る」という観点から、MRの人づくりの課題について、次のような生の声を耳にします。

社会全体のモラル低下、価値観や感性の多様化で、MRの人的資質や倫理観が弱くなっている。医療の一端を担う専門職でありながら、患者や家族の思いをしっかりと実感できていない面もある。厳しい事業環境の中で、MRとしての働きがいや使命感が時に見失いがちにもなることもある。人間力を高める新たな教育が求められているが、その具体策が十分見出せていない――。

そこには、MRの人づくりの課題となるキーワードがあります。人的資質、患者家族の思い、使命感、新たな人間教育です。このキーワー

ドに沿って解決の方向性を考えてみます。

経営トップと研修責任者の本気度が社員の心を左右する

人的資質：それは、MRの心を育てることです。しかし、現実の中で、心を育てる取り組みをすることは、本当に難しいものです。なぜなら、心は見えません。すぐに効果も出ません。形式的になりがちです。

以前、MR用倫理教材制作の企画を、ある出版社からいただきました。その経営者の言葉が忘れられません。「倫理教育はみんな関心が薄いです。売上になりませんから。とにかく所定時間を、手間を掛けずにさっと済ませればいい感じですよ」。

心の教育を、最上位に位置づけてください。もちろん専門職として知識や技能はとても重要です。しかし、それは道具です。道具を生かすのも殺すのも、その人の心で決まります。また、その中身も、倫理やコンプラ

イアンスに加えて、人間教育として、MRとして働くこと、生きることを加えることも大切です。

実は、心の教育に当たって一番問われることは、経営トップと研修責任者の本気さです。多業種の企業に伺い感じることがあります。心の教育を大切に思う経営トップと研修責任者がいると、社員の意識も高く、技能・知識教育も充実しています。見えないものが定まれば、見えるものはさらに行き届き、輝くのは当たり前です。企業の底力は、見えないところで勝負がついているように思えます。

患者家族の思い：MRが、日常業務の中で患者家族の声を直接聴く機会は、制限されています。だからこそ、研修の中に、そのリアルな場をつくる必要ではないでしょうか。MRの研修プログラムの中に、必須化している企業は少ないように思います。

現在、病気別にたくさん患者家族会もあり、講演する人も多くいま

す。ぜひ患者家族の生の声を聴く、向き合う機会を必須化してください。リアルな現場にこそ、事実と心を感じるものがあるのです。

使命感：使命は、命を使うと表します。限りある自分のいのちを何に使うのか、それを自分に問いかける中でこそ、使命感は醸成されていきます。それは、本当に大切なこととは何か、どう生きるのか、どう働くのかを思うことでもあります。

そのきっかけとして、生と死、凄いきりや死に様に向き合うことをしてください。東日本大震災の被災地の方の姿や思いが、たくさんの方の生き方を変えています。それは、いのちと向き合ったからです。辛く涙する場もあります。だからこそ、尊いものを気づかせてもらえる、そう思うのです。

新たな人間力教育：人間力は、人づくりの永遠のテーマです。そのプログラムは多種多様です。企業ニーズを取り込んで、新しい取組みにチャレンジし続けてほしいものです。その参考事例として、拙いものですが私の取組みをご紹介します。

MR向け 「臨床いのちの講座」の試み

本講座は、「いのち」をキーワードに、企業人と医療人の両面から、高い倫理観（生命尊重）・豊かな人間性・職業への使命感を醸成するための一日セミナーです。企業での人材研修、医療者や看護学校での「いのちの講座」をベースにMR向けにアレンジしたものです

主なテーマは、①いのちをみつめる意味、②患者家族の思いを感じる、③MRとして働くこと、④自己改革

宣言・まとめです。

進め方は、まず、心を育む・いのちをみつめることが、個人や企業にどんな意味があるかを考えます。次に、小児がんで死んでいく少女と家族の姿などを通じて、いのちや患者家族の思いを感じます。そして、MRとして働くことを心に定めます。

セミナーでは、自問自答することを大切にします。何のために生きるのか、働くのか、自分の使命とは……。それが自分の心を育むきっかけになるからです。

本講座（MR認定センター主催）を東京で開催（9月22日）しました。MR研修担当者が集い、本講座を体験して、今後の倫理教育のあり方を意見交換しました。参加された方々の反応です。

「感動の中で、心を育むこと、いのちをみつめる意味を実感できた。ぜひ多くのMRにも聴いてもらいたい」「いのちへの確かな思いのある人づくりをするための方向性が明確になった。今後のMR教育に取り入れたい」。MR認定センターの近澤洋平氏は、「MRとして働く誇り、使命感、覚悟が導かれた。自分の仕事を意味づける、患者家族の思いに向き合う大切さを改めて気づかされた」と語られます。

いのちをキーワードにした人間教育が強く求められている。そのことを改めて感じています。

今こそ、原点回帰

社会が揺れていると言われます。実は、揺れているのは社会ではなく、自分の心です。すべきことは、まず自分の心を定めることです。現実が厳しくなるとつい、目先どう上手くやるか、新しいものに飛びついてし



臨床いのちの講座 参加者は思いを語り合った

まいます。でも自分の心が定まっていなければが揺らぐばかりです。今こそ、原点回帰です。

MRの人づくりも同じです。いのちを支え守ることを使命とする、いのちへの確かな思いのある人材を育てる、それに尽きます。いのちを支え守ることは、絶対的な存在価値です。存在価値があるものだけが、どんな時代になろうとも輝き続けることができます。

人づくりは、直ぐに成果が出るものではありません。10年、20年と、愚直に続けてください。それが、100年の人づくり、100年の企業になっていくのです。

来年2012年は、日本でMRが誕生して100年です。100年後、「MRは、薬を通じていのちを支え守る人です」、日本中の方がそう言ってくれることを願っています。あなたの薬を待っている患者家族とともに……。

鈴木中人 NPO法人いのちをバトンタッチする会代表、(株)ライフクリエイイト研究所代表取締役、(株)デンソーに25年勤務。05年に早期退職し、全国の学校・行政で「いのちの授業」や、企業で「いのちの研修」に取組む。13万人が講演やセミナーに参加。名古屋市立中央看護専門学校非常勤講師、名古屋国立医療センター臨床研究審査委員他 <http://hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/>

